

# 木の目草の芽

# 木の目草の芽

2016年12月16日  
公益社団法人  
日本山岳会  
自然保護委員会  
TEL:03-3261-4433

年間購読料 1,000 円  
申込 : 047-463-8721  
syuaki@pony.ocn.ne.jp  
郵便番号00180-4-710688  
加入者名 : 川口章子

11月25日、JACルームにてシカ研究者の高槻先生にご講演いただいた内容を紹介します。

## 公開講演 「シカ研究者がみた最近の日本の山」

麻布大学のちの博物館 高槻 成紀

### ▼シカの現状

シカは過去30年ほどで急増した。その原因はよくわかっていないが、事実として確認されているのは、シカの捕獲数が1990年代後半から急増していること、北海道から九州までの太平洋岸の広い範囲で「激」ないし「強」レベルの被害がみられるようになったことなどである。「激」とは植物が貧弱になったために土砂崩れが起きている状態であり、「強」は植物が貧弱になり、多くの植物が減少し、一部に有毒植物や棘植物などだけしか生育していない状態である。

野生動物による被害問題はイノシシ、ネズミ、サルなどでも起きているが、これらは農地への被害であり、自然植生への悪影響を起すのはシカだけである。

### ▼シカという動物

シカは繁殖力が強く(1歳から妊娠を始め、2歳以上はほぼ全個体が毎年妊娠する)、食性幅が広く、群れをなすという点で同じ反芻獣のカモシカと違いがある。カモシカは2歳くらいから妊娠を始め、70%程度であるし、栄養価の高い双子葉植物を選択的に食べ、低密度でなわばりを持って暮らすという違いがある。そのため、シカが増加すると植物に強い影響をおよぼすことになる。

### ▼シカにとってのササ

こうした影響のひとつの表れは、ササへの影響である。ササは日本の落葉樹林の下に豊富に生育し、しかも常緑であるから、シカがいれば、冬には必ず食べる。なかでもミヤコザサは中部地方から東北地方、北海道にかけ

## 第125号

### 〈目次〉

- P.1 公開講演会  
「シカ研究者がみた最近の日本の山」  
高槻 成紀
- P.5 第2回樹木観察会報告  
牧野記念庭園 小原 茂延
- P.6 「山の日」レポート  
・福島支部 高田 雅雄  
・群馬支部 北原 秀介  
・山梨支部 大澤 純二
- P.9 自然観察会報告  
埼玉支部 高嶋 徳紘
- P.10 寄稿 : 大鹿村を破壊する  
リニア中央新幹線  
佐藤 明徳

てシカの重要な食物となっている。ミヤコザサは植物に対して有害である冬の乾燥した寒い風を避けるために、冬芽を高い位置にはつけず、地際につける。そして春にのびた茎は夏に光合成をし、冬を越したあと翌年には枯れる。このことはシカの食物として重要な意味をもっている。すなわち、食物が最も乏しい冬に豊富にあることはシカにとってきわめて重要である。しかしいくら豊富で栄養価が高くても、再生力がなければ長い期間有効な食物とはなりえない。この点、ミヤコザサは寿命が短いいため、冬に食べられることはあまり被害にならない。

現にミヤコザサは中部、北関東、東北地方、北海道のシカにとって重要な食物となっている。

### ▼シカと植物

シカの影響下の植物を観察すると次のようなことがわかる。

植物の多くは食べられたら減少するが、一部の植物は不定芽から芽を再生させて、補完的な生育をすることができる。アズマネザサの例では、シカのいない場所では高さが2メートル以上あったが、シカがいる場所では30cmほどしかなかった。しかし密度は逆の関係があるために、高さや密度の積には違いがなかった。これはアズマネザサがシカに食べられた場合、茎を再生させ、葉を低い位置につけるためである。

また植物の中にはいやな匂いがしたり、苦い味がしたり、有毒であるなどの「化学防衛」をする一群がある。草本ではクリンソウ、ハンゴンソウ、ウラシマソウ、フタリシズカなど、低木にはレンゲツツジ、アセビなど、高木にはオオバアサガラ、イヌガシなどがある



化学防衛のクリンソウ



物理防衛のサンショウ

ほか、シダ類にはシカが食べないものが多い。またサンショウ、メギのようにトゲで食べられなくなる「物理防衛」をするものもある。ブナやナラ類など森林を形成する樹木の若木がシカに食べられると森林の後継がなくなるために森林が更新されなくなる。現実にはシカの多い宮城県の金華山島では柵内では森林ができたが、柵外ではゴルフコースのようになつてしまった。



金華山島に作られた柵内外の植生

これは「シカは森を食う」ということを如実に示している。

▼思いがけない影響  
尾瀬は冬に3メートルもの雪がつもる多雪地であり、シカはすんでいなかった。しかし1980年代に夏の生息が確認され、湿原への影響が懸念された。実際に調べてみると

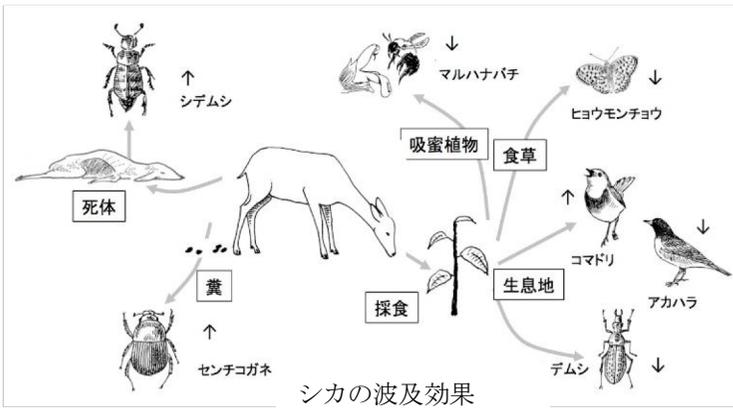
シカがミツガシワの地下茎を好んで食べるということがわかった。ミツガシワは水が深い場所に生え、その近くにはしばしば田んぼの畔のような構造があるが、シカがこういう場所でミツガシワの地下茎を掘り出すと、畔のような場所を破壊され、たまっていった水が流失する。このためシカが湿原に入ると湿原全体が悪影響を受けることになる。釧路湿原などの湿原でもかつてはほとんどなかったシカミチが最近になつてきたところがシカミチだらけになつた場所がある。

南アルプスではシナノキンバイなどの高山植物が咲き乱れていた場所で、現在ではそうした植物がほとんどなくなっている。東京の雲取山などでも、マツムシソウなどが咲いていた場所が、今ではマルバダケブキやワラビだけの群落になつてしまった。

### ▼シカの影響の波及効果

シカが増えれば植物が減少し、さまざまな変化が起きる。奥多摩で東京都水道局が作った柵の内外を比較した事例では、次のようなことがわかった。柵内には植物が豊富だったが、柵外にはオオバアサガラとイケマというシカが食べない植物がわずかに生えているだけで、地表が裸出していた。地上徘徊性の昆虫を地面に埋めたトラップで調べたところ、柵外でオサムシなどが少なかった。地表の温

度と湿度を調べた結果、柵外では昼間に地表温度が50度にもなり、湿度も50%程度に乾燥したこと、オサムシなどにとって過酷な環境になったためと推察された。しかし糞虫とシデムシは柵外のほうが多かった。これは柵外にシカの糞が供給されること、事例は少ないかもしれないが死体も供給されることによるものと推察された。紀伊半島の大台ヶ原や日光での事例では、シカがいる場所では草原性の鳥類が増え、森林性の鳥類が減ることが示されている。



シカの波及効果

また日光ではクガイソウが激減したために、それを食草とするヒヨウモンチョウが絶滅したことが知られている。乙女高原での調査で



奥多摩で起きた土砂崩れ

は、柵内で虫媒花が100倍も多くなった。

このようにシカが植物を食べることによりさまざまな動物の間接的な影響を与えていることがわかる。同時に土壌そのものへの影響もある。奥多摩で地表面に土壌移動をとらえる木箱をおいたところ、柵内での土壌移動は少なかったが、柵外では多くの土壌が移動することがわかった。これは植物がなくなったために雨滴が土壌を直接打つためである。実際にある場所で大規模な土砂崩れが起きた。

### ▼シカ増加の原因

ではなぜシカは過去30年ほどに急増したのであろうか。よくいわれるのは、オオカミ

がいなくなったため、暖冬によってシカの死亡率が下がったため、森林伐採によって食物になる植物が増えたためなどの説明である。しかしオオカミは絶滅して100年以上経つが、80年ものあいだシカが増えることはなかった。暖冬傾向はあるが、その変化はゆるやかであり、徐々に起きているが、シカの増加は「ウナギ昇り」的であるから説明できない。森林伐採は1960年代からむしろ抑制されてきた。これらはいずれも最近のシカの急増を説明できない。

私が一番ありうると考えているのは、日本の山里、里山から活気がなくなり、野生動物に対する防衛力がなくなったことである。この30年ほどで過疎、そして20年ほどでは限界集落ということばが聞かれるようになり、実際にゴーストタウンのような村落が増えている。こうなると、野生動物にとって食物はある、危険はない理想的な環境が出現することになる。現実には原発事故後の福島県ではイノシシの増加、昼間でも出現するなど行動の変化が起きている。

今後、各地の山村で過疎化がさらに進むことが予測され、シカを含む野生動物による問題がさらに深刻になることが懸念される。これを抑制するためには、農業社会そのものの抜本的改革が必要だと思われる。



ルーム 104 号室にて講演前の高槻先生

### ■質疑応答

〈シカの性質について〉

・シカは夜行性？

本来は昼行性の動物だが、狩猟の対象となつてからは夜に行動するようになった。

・雲取で人の尿をなめている？

ミネラルの補給をする。塩カルなどもなめる。

・多雪地域にシカが入る理由

シカは雪に埋もれるので雪深い地域には生息してはなかったが、数が増えてくると餌を求めて少しずつ行動範囲を広げて移動するようになった。雪のない夏季になると標高の高い場所にまで上がるようになった。

・寄生虫の心配は？

シカと寄生虫との関係はあると思うし、マダニもシカが運んでいると思う。これについては病理的レベルで対策しなければいけない。

〈シカ対策について〉

・シカ個体数の適正管理について

適切な頭数管理というのはその場の環境によつて異なるので一概に言えるものではなく、多過ぎるかどうかは山の状態を見ればわかる。重要なのは山の状態を見て判断できる人がいること。自治体では捕獲枠を設けて頭数管理を続けているところがあるが、縦割りを超えて互いに情報交流をしたほうがよい。野生動物問題は総合教育にも適した教材なので、教育現場でもとりあげるべき。

・シカ食害の防ぎ方は？

決定的な解決方法を挙げることは難しい。農業人口が減り農山村に活気がなくなっていることが問題と思う。大事なことはまず今、山で起きていることを知ること。

・シカが出没するようになったらどうすべきか？

とにかく前線のシカを食い止めていくしかない。効率が悪いが、根気強くハンターに狙ってもらおうしかない。

・シカのワナ猟の効果は？

有効性は高いと思う。兵庫県では半分以上はワナ猟を行っている。ただ、けもの道がどこにあるかがわかる人がいなければワナを仕掛けるのは難しい。

・研究者の数は？

シカ研究者の数は少なすぎる。生態学を学んでいる現役の学生は多いが、卒業後に仕事としてつなげられる機会が少なく、残念ながら別の仕事に就いてしまっているのが現状。

・ジビエについて

安く安全に流通できるようにしなければよいと思う。アメリカでは捕ってきたシカなどが食卓に並ぶこともよくある。日本でも江戸時代にはけっこう食べていたようだが、現在は野生動物を食べるといふことに抵抗があつてなかなか定着していない。

・登山者にできることは？

研究者に限らず、皆さんのような登山者の立場からも山でシカが増えているということを発信することが重要。様々な立場の人が様々な理由から問題提起してほしい。

参考：「シカ問題を考える」

高槻成紀著（ヤマケイ新書）



自然保護委員会主催

## 「第2回樹木観察会」

― 牧野記念庭園 ―

今回は、東京西郊の練馬区大泉にある「牧野記念庭園」での観察会となった。牧野富太郎博士の自宅跡地は面積も2200平方メートルと、そう広大ではないものの、博士が生前、国内外より探し求めた300種類以上の草木類が植栽されているとのことである。

6月5日、雨も上がった記念庭園に集合したのは定員とした20名余の参加で、九州福岡から来られた方もいて、配布された資料に熱心に目を通して、姿が印象的であった。今回の講師は、当会会員で森林インストラクターの平野裕也氏で植物に関する指導のベテランとの紹介があった。

講師の作成された庭園で見られる植物の一覧表を参考にしながら庭園内を巡る。見上げるばかりのダイオウマツから解説が始まり、豊富な知識から展開する木々にまつわる話は興味津々、皆引き込まれ、うなづくことしきりで、ザイフリボクやヘラノキと言った聞きなれぬ樹名がシデザクラやし

ナノキの別名であると聞き、多少分かっていくなど、講師との質問も交わされてきて好ましい。丁度時期のアジサイについては、花の構成の解説に加え、シーボルトが妻である滝の名を付けてヨーロッパに紹介した話などのエピソードも交えたり、センダイ

ヤザクラという桜は、仙台ならぬ高知県の仙台屋という店の前にあったものを牧野博士が命名したそうで、初めて聞く方も多かつたようだ。イイギリやユキノキなどの名の由来にも言及されたほか、モチノキ、サイカチあるいは草本の数々に的確で、記憶に残る解説に参加者の満足するような様子が見て取れた。

なお、庭園内には牧野博士が94歳の天寿を全うされるまで、研究執筆された書齋と書庫が保存されており、別棟には常設・企画展示室もあって、牧野富太郎の偉大な生涯を知ることができる。

前回、講師を務められた山田副会長や観察会全般準備の川口自然保護委員長及び、委員会関係者等の努力に感謝し、今後とも山岳愛好者の自然に対する意識の向上と知識の習得を願ってやまない。

（緑爽会 小原 茂延）

編集の都合で掲載が遅れましたことをお詫びいたします。



# 「山の日」レポート

福島支部自然保護委員長 高田 雅雄

## 8月11日 あだたら山親子登山

今年新たに制定された国民の祝日「山の日」に伴い、JAC福島支部は一般公募の17家族・62人が安達太良山に集う「第1回親子登山」を開催することができた。実施にあたり小林支部長以下が富士急安達太良観光(株)、福島民報社、地元山岳団体、くろがね小屋等に働きかけ、その協力を得て「20家族・50人の親子」を「安達太良山」に誘い、これを支部が全面的にサポートし、参加者に山の良さを知ってもらう、という公益団体としての活動に取り組んだ。

### 一般公募の経緯と参加者集約

6月9日(金)、小林支部長と事務局が福島民報社事業部を訪れ、「共催での親子登山開催」を打診、同社も即刻これに同意した。さらに6月中旬、富士急安達太良観光(株)に対しても趣旨説明と後援の申し入れを行い、ロープウエー割引等の協力を確保できた。福島民報社では7月8日付紙面で「親子登山参加を呼びかける記事」を掲載、イベント成功に向けてスタートを切ることができた。ところが、思ったほどの反響はなく、支部員個々に勧誘

と働きかけをお願いしてようやく「17家族62人」の参加を実現させることができた。

### 支部、民報社、富士急観光等の支援状況

最終的な参加者は登山経験のない幼児、小・中学生(当日30人参加)をはじめ、78歳の高齢者まで幅広く、その絶対安全を確保するため、支部員18名がサポート役を務めた。中でも17家族を7班のグループに分け、支部員1〜2名が担当班のガイド役を務め、先頭と後方の引率責任者、さらにフリーで動ける救護・救助班を配置して万全の布陣で臨んだ。さらに福島民報社、地元山岳会等の支援もあり、最年少の2歳男児、3歳、5歳男児(各1名)、孫を連れた祖父母、40〜50歳代の若い両親と親子といった家族登山にふさわしい山の日イベントとなり、結果的に全参加者が予定の登山コースを踏破できた。

### 参加者の反応など

8月22日、参加者家族から支部事務局宛に一通のハガキが届き、これには小4女兒「山の中でしか見れない花、こん虫にあえて楽しかったです。また山のぼりしたいです。」、小3男児「山のぼり楽しかったです。またってぺんにいきたいです。」と書かれ、両親からも是非来年も参加したい旨の感謝の一文が添えられていた。

今回の親子登山は、実施当日夕のTVローカルTV番組で放映されたほか、翌日の各紙朝刊でも大きく報道された。



安達太良山山頂付近で

参加者全員が記念撮影

群馬支部自然保護委員長 北原 秀介

平成二十八年八月十一日から「山の日」が国民の休日となり、各地でイベントが催されたことでしょう。群馬県も東南の一部を除いて周囲が山々であることから、多くのイベントが開催され、その中で日本山岳会群馬支部が協力したイベントの報告をいたします。

はじめに本年高知県で開催された自然保護全国大会で報告させていただきましたが、群馬県は本年四月に「群馬県山岳団体連絡協議会」（以下協議会と称す）が組織されました。これは、日本山岳会・日本山岳協会・日本勤労者山岳連盟の三団体が協力して安全登山・



遭難防止対策・自然保護活動・イベント開催等の連絡調整を行うことを目的として結成され、さっそく今夏は速やかに各事業が実施されました。

八月六・七両日で群馬県庁の一階フロアにおいて「山フェスタ」が開催され協議会が作成した「山のグレイディング」の紹介等があり、引き続き八月十一日に谷川岳でイベントを開催し「家族で谷川ウオッチング」と称して群馬支部自然保護委員会がリーダーとなって自然観察会を行いました。当日は募集定員を超える三十四人の親子が参加してください、コースは湯檜曾川に沿った新道を紅芝寮まで歩き、紅芝寮では水上町が用意してくれた地元産のスイーツを町長自ら全員に振舞ってくださいました。復路は標高差八十メートルを登り旧道を谷川岳山岳資料館まで戻りました。この間、往路は、群馬県立女子大学名誉教授の斉藤晋（当会群馬支部顧問）先生が植物等の生態系について説明して下さい、子供たちは湯檜曾川流域で発見された「絶滅危惧「B類」となっている日本固有種のユビソヤナギの紹介から樹齢二百年前後と言われるブナ林、さらに栃の実やシダ類の話を中心に聞いておりました。復路は、私（北原）が幽

ノ沢や一ノ倉沢の出会いで谷川岳の成因と山を構成する岩石の話、さらに本年六月に千葉支部が谷川岳で行った自然観察会に参加させていただいた折、小疇先生からお聞きした氷河地形とモレーンのお話をそのまま請売りで説明をしながら、盛況のうちに終えることができました。

なお、三団体が分担して実施した谷川岳イベントは以下の通りです。

- ① 親子でチャレンジ天神尾根登山ツアー
- ② 家族で谷川ウオッチング自然観察会
- ③ 日本三大急登西黒尾根登山ツアー
- ④ まぼろしの国道二九一号弾丸ツアー
- ⑤ おなじみ一ノ倉沢エコハイキング
- ⑥ 紅芝寮カフェ&スイーツツアー

協議会は、群馬県の提案により白毛門から四阿山鳥居峠までの百キロメートル稜線ロングトレイルコースの整備を行うことになり、今夏は三団体で区域分担し調査を実施しました。稲含山く白砂山間など既存のトレイルが無い区域も存在し、コース作成にあたって自然環境の維持やその後の整備に対し、自然保護委員としては慎重な対応が必要と考えております。

山梨支部自然保護委員長 大澤 純二

「登山基礎講座」を開催

山岳環境保全に関する法令について

山梨支部では、「山の日」制定記念事業として、2015年より「登山基礎講座」を開催しており、今年は2年目になる。登山初心者を対象として、全14回の講座を9月から12月にかけて毎週木曜日、山梨学院大学生涯学習センターのご協力のもと、開催している。

講座の内容は、安全に登山するために必要な基礎的な知識や技術として、安全登山概論、地図読み、山の気象、救急法、装備・服装、ロープワークなどの講義があり、実習も行っている。また、登山を巡る文化面、たとえば、山梨県の登山史、山の文学、写真撮影やスケッチの技術なども含まれる。

第1回の講座では、オリエンテーションに続き、山岳環境保全に関する法令について、支部員である古屋寿隆が講義した。法令としては、「自然公園法」、「文化財保護法」、「山梨県希少動植物種の保護に関する条例」、「自然環境保全法」、「山梨県自然環境保全条例」、「環境基本法」などが取り上げられ、優れた自然

の風景地の保護と利用、生物多様性の確保について概説した。

この春、岐阜県や石川県にある、天然記念物の巨石にロッククライミング用のハーケン・ボルトなどが打ち込まれているのが発見されたのをきっかけに、全国各地で同様の問題が見つけ出された。ここ山梨県甲府市でも、特別名勝「昇仙峡」の岩場にハーケン・ボルトが見つかっている。

もともと自然愛好家でもある受講生にとっても、この問題に関する法律的な背景を知るとともに、自然保護に対する意識がさらに高められたことと思う。

■原稿をお寄せください

今回は、各支部で行われた「山の日」関連行事を、自然保護委員の目線でご報告いただきました。

行事報告に限らず、自然保護をめぐって普段考えていることやふと感じたことなどありましたら是非お寄せください。

◆購読料とカンパを

ありがとうございます

〈2016年度〉

- 平石弘子(東村山市) 齋藤長作(渋川市)・
- 穴田雪江(東京都練馬区)・山本敏子(東京都江戸川区) カンパ含む・鳥橋祥子(東京都杉並区)・福田光子(秋田市)・島田稔(東京都新宿区)・筑木力(新潟市)・富田令子(千葉市)・金井善男(上田市)・坂本眞生(安芸市) カンパ・黒田正雄(我孫子市)・宮澤美緒子(東京都杉並区)・上田景子(栃木市)・江花俊和(福島県耶麻郡)・大口瑛司(北名古屋市)・権藤司(安曇野市) カンパ・桐山裕子(藤沢市)

合計 3万1千円



〈埼玉支部主催 自然観察会報告〉

玉原高原ブナ林・湿原

(10月22日・23日)

埼玉支部自然保護委員長 高嶋 徳紘

「深田クラブ」・「山の会すかんぼ」ら16名により実施。

武尊山南西部が玉原高原で標高1200m～1350mの溶岩台地上にある。

分類上の位置：被子植物門―双子葉植物綱―離弁花(古生花被) 植物綱―ブナ目―ブナ科―ブナ属

学名：Fagus crenata Blume(Fagus 食べら

れる、crenata 鈍鋸歯のある)(Blume 命名者)

形態：雌雄同株・雌雄異花。5月に開花

性質：陰樹、落葉広葉樹で世代交代ができ

安定した極相林を造る。樹高15～20mに達

するの100年、径1mに300年かかる。

公益性：ブナ(ブナ科を含む)の最大の公益

性は「保水力」即ち、災害対策並びに水源涵

養である。さらには漁業資源育成に欠かせな

いのもブナ林の存在である。

玉原のブナ林

地理的に太平洋側であるが、群落組成特徴

は日本海側型(ブナ・チシマザサ群集)

日本海側型ブナ林が太平洋側型へ向かう最

前線に位置する。

●玉原にはイヌブナ(株立)は生育していな

い(迦葉山・川場・三峰山・小持山にはある)

○玉原のブナ林はブナ・チシマザサ群集で、

2亜群集・4変群集に区分できる。

(ブナは一本立)

組成 標徴種はアカイタヤ・ムラ

サキヤシオ・コミネカエデ・ハイイ

ヌツゲ・ハイイヌガヤ・エゾユズリ

ハ・ツルシキミ・ヒメモチ(ユキツ

バキは無い)

○トチノキ亜群集

組成 識別種：トチノキ・オシ

ダ・テツカエデ・エンレイソウ・ニ

ワトコ・エゾアジサイオクノカンス

ゲ・マルバフユイチゴ・タニギキョ

ウ・サワハコベ・オククルマムグラ・

キヨタキシダ

分布：ブナ平・鹿俣山・ニヶ禿山

の平坦地から緩斜面にかけて広がっ

ている。この群落が平尾根から緩斜

面上部迄発達することが、他の日本

海側地域のブナ林に比較、玉原ブナ

林の特異性を示している。

★第1次観察会は2015年6月13日～14

日に実施し、支部員&自然保護委員会10名で

ジャンボタクシーを用いたが、今回はレンタ

カーを用いた為、各地を訪れることができ充

実した観察会であった。



# 大鹿村を破壊する

## JR東海・リニア中央新幹線(1)

長野県下伊那郡大鹿村 佐藤 明徳

はじめに

住民を締め出す『着工』に未来はあるか

去る2016年11月1日、東海旅客鉄道株式会社(以下、JR東海と略す)はリニア中央新幹線・南アルプストーンネル建設工事(長野工区)の安全祈願祭・起工式を強行した(これをもって、JR東海や各報道は「着工」としている)。出席したのはJR東海の山田会長(一昨年、社長時代に「リニアはペイしない」とマスコミに語って大問題となった本人)や柘植社長、長野県の阿部知事、近隣自治体の首長、建設工事関係者など約100人であった。不思議なことに、この起工式の場所について事前には多くの住民が知らされずにいた。村の同報無線でもこの日に起工式が行われることは知らされていたものの、具体的な時間や場所についての連絡は一切なかった。それでも、前日には会場と思われる場所に大きなテントが二張り、その周辺がJR東海の社員などの関係者でこた返していたのでそれと知れた。しかし、この場所が長野工区最大の工事現場なのではない。実はこれよりさらに奥の集落(釜沢地区)が最大の工事現場となるのだ。テントの中での起工式、鍬入れ

など、JR東海の形式だけの「着工」がそこには垣間見える。

一方、起工式当日、住民ら約50人が小渋橋付近で会場に向かう車列に対して抗議の意思を示すアピールを、次いで会場前に移動して同様の抗議活動をした。私がメッセージとして掲げたのは次の2つ、「南アルプスを守ろう 日本の子孫にリニアはいらない」「NO!リニア 真の文明は 山を荒さず 川を荒さず 村を破らず 人を殺さざるべし」である。本来であれば、このような村や住民に広く関わる式典には住民を「喜んで」招待するものだが、JR東海は決してそのようなことはしなかった。現場で出迎えたのは、首から番号札を下げた立ちはだかるJR東海の社員たちだけだった。奥の会場からは、各種説明会で住民に対して高圧的だった同社社員が双眼鏡でこちらの様子を観察している。先述の住民への周知の仕方、なるべく知られないうちに事を済ませようとする姿勢をはじめとして、JR東海が今回の工事をどのように進めて来たか、そしてどのように進めて行くであろうかを端的に示す出来事であった。折しもこの日、赤石岳は今シーズン初めての冠雪をした。

### 1. リニア中央新幹線は本当に必要なのか (1) リニアの必要性に対する矛盾

JR東海は、リニア中央新幹線建設の必要性

を現在の新幹線の輸送力が限界であることや災害時の代替路線としての役割を強調する。しかし、輸送力に関しては特定の時期を除いて年平均50〜60%の座席占有率であるため、「飽和状態」とはいえない。これから日本の人口が減少すれば、新幹線をおもに利用する生産年齢人口も大幅に減少する。また、既存の新幹線や航空各社と限られた乗客の奪い合いになることが予測される中で、本当に建設する必要があるのか。加えて、現在の技術では営業に支障をきたさないように新幹線を補修・修繕することは充分可能である。さらに東日本大震災の経験でも明らかのように、災害時に有効なのは物資の輸送路をいかに確保するかであり、それにはリニアはまったく役に立たない。むしろ北陸新幹線の敦賀から先、大阪方面への延長を優先すべきで、これがバイパスの役割を果たす。他路線との互換性がないことなども含め、リニア方式による中央新幹線を建設する必要性はまったくない。

### (2) 優位性はスピードだけ―

「時代に遅れた」リニア

リニア唯一の優位性、最高で時速500<sup>km</sup>超といわれるスピードだが、はたして今このような乗り物が必要なのだろうか。現代の高速鉄道に求められる要素は、「安全に」「安価で」「そこそこ速い」

〈寄稿〉

である。ある区間だけ速くとも前後のアクセスに時間がかかるのであれば、輸送力としての優位性は必ずしも持たない。そうあれば既存の新幹線を拡充させた方が経済的合理性は高い。技術力の追求は必要かもしれないがそれは実験の範囲で行うべきであり、大きな自然破壊をともなうような建設工事は決してするべきではない。リニアは全体としての対価があまりにも高すぎる。ある意味でリニアはすでに時代遅れの乗り物ではないのか。リモートコントロールによる運転や約86%ものトンネル（東京―名古屋間）、近い将来起こるといわれる東南海トラフを震源とする巨大地震の対策地域（震度6程度以上）に路線の一部がかかっている。ここには糸魚川静岡構造線（フォッサマグナ）や中央構造線も通っている。もし高速走行中、トンネルの横切る断層がたとえ50cmでもズレたら……結果は明白だろう。山中深いトンネルでこのようなことが起きたら、あとは地上まで自分自身の足で出てくるしかない。はじめから外の景色などは望むべくもないが、誰がこのような危険な乗り物を望むのだろうか。

### （3）全国新幹線鉄道整備法（全幹法）

#### との整合性

この法律に基づく許認可を受けてはいるものの、同法は大都市（東京など）と全国の中核都市を結ぶのが本来の趣旨だが、リニア中央新幹線は全く

異なる。大都市間を結ぶだけがその機能である。当初は中間駅設置の予定すらなかった。したがって、この点だけでも「不適格」である。この全幹法適用は、JR東海が地方自治体（都府県）による土地の強制収用代行を目的にしたとも考えられる。他方で、同社は計画当初から「JR東海単独での建設」を言い続けている。これも全幹法の適用とは相容れない。つまり土地収用などに関しては公権力の力がほしい、されど経営に関わることには口出ししないほしいという自己中心的な論理なのである。

### （4）リニア建設費用とJR東海の経営

当時の山田社長（現会長）が「リニア単独ではペイしない」と述べたように、リニア中央新幹線の建設費はきわめて高額で、東京―名古屋間の建設費が5兆5,000億円である（2016年10月現在）。南アルプスを貫通させるトンネル工事は破砕帯の通過も含め、難工事が予測されている。建設費用の増加などは、当然JR東海の経営を圧迫する。本音を言えば、JR東海自身もどの段階で公金が投入されるか（してもらえないか）が当面の関心事であるともいえよう。案の定、安倍自民党政権から財政投融资による3兆円投入の計画が持ち上がり、今秋の臨時国会を経てJR東海にこの「公金」が渡ることになった。財政投融资の資金は公金、すなわち国民の税金である。リニアそ

のものの国民的な論議も全くない中で、たいした国会審議もなく、誰も望みもしないリニアに税金が勝手に使われるなど、許されてもよいものだろうか。

### （5）リニアの動力源―原発との関係

リニアの技術（超電導）は、安定的かつ多量に供給される（原発による）電力と裏腹の関係にある。このことなくしてリニア中央新幹線は成立しない。昨年に東京電力と中部電力のJVによる火力発電所建設の計画が公表されたが、これはリニア対策との見方もあるものの一時的なものに過ぎない。すでに新潟県柏崎（柏崎刈羽原発）から山梨県大月（リニア実験線）までの高圧鉄塔Ⅱ送電線などがあるように、あくまでも原発による電力を使用することが「前提」なのである。

リニア中央新幹線は東京都や神奈川県にかけて、また名古屋市近辺ではそのほとんどが地下40メートル以深に建設される。いわゆる大深度法（大深度地下の公共的使用に関する特別措置法、2001年制定）によるものだが、11月の福岡県のJR博多駅付近の大規模な陥没事故を例に出すまでもなく、建設中のみならず建設後も何らかの要因で陥没事故が起こる可能性は否定できない。また掘削によって発生した土（残土）はどこへ運び、どこへ置くのか。大鹿村の実情については後述し

たい。これらの問題を考えるだけでも、みなさんの住んでいる地域が決してこの工事と無関係とは言えないのである。

## 2. JR東海の一貫した対応

### 住民の理解・同意を判断するのは

#### 自分たちとする傲慢さ

起工式の日程を決定するにあたり、JR東海は大鹿村や議会に対して繰り返し要請をしている。それは「着工をするために早期の同意を」というものであった。直近だけでも、実施日の予定が11月1日以前にも2日ほどあったという。JR東海の当初の計画案によれば南アルプストンネルの着工は2014年を予定しており、破砕帯の掘削など難工事が予測されるこのトンネル工事には残された時間が少ない。とにかく1日でも早く着工したいとの強い意向が働いたのは想像に難くない。

しかし、住民への説明会（環境影響評価準備書に関する説明会以降、年に数回実施）を開くなかで一昨年（2014年）、JR東海の沢田尚夫・中央新幹線建設部担当部長（長野県工区担当）は「住民の理解と同意を得るまでは決して着工しない」と明言していた。だが、実際の説明会では住民から再三の疑問や反対意見が出ていたにも関わらず、JR東海側からの具体的な改善案提示などはほとんどなかった。そして説明会を開くたびに、「住民

の理解は深まった」（沢田氏）と一方的に判断し続けてきた。今までのレポートでも触れてきたように、説明会は運営方法（質問は1名3問まで、再質問不可、時間の途中でも切り上げなど）等数多くの問題を抱えながら、とにかくやっただけという「既成事実」を積み重ねたに過ぎない。ただし、これら一連の説明会でリニア賛成の論陣を張った人物が誰一人としていなかったということは見落としてはならない事実である。

数回にわたる説明会の中で、JR東海が長野県環境影響評価技術委員会などからの具体的な指摘・提案や住民からの要望に対して「採用」したものはごくわずかだ。一例はルート上の青木川渡河を地中化したことだが、これは計画したルートトンネル口付近が地滑り帯で、建設したトンネル口自体がずれる可能性があるという技術的な問題からである。これ以外のほとんどはJR東海側の都合、すなわち費用や工期の問題から「却下」している。柳島村長が住民のメリットとした県道59号線（松川インター大鹿線、通称、小渋線）の改良工事だけを「代償」に、JR東海は自分の立てた事業計画通りに進めようとする。その道路改良も村側からの完全二車線化の要望は反故、小渋ダム湖にかかる四徳大橋や半ノ沢橋などは現状のまま、道路拡幅も最小限、住民の最低限の要望ですら無視されている。

JR東海の住民に対する不誠実な対応は枚挙にいとまがない。このひとつにあるのは住民間の「分断」である。各自治会の説明会だけでなく、地区内の住民間にも異なった情報を流して住民の意見を1つにまとめさせないように画策する。住民は他の事情も分からないまま、村の担当職員を伴ったJR東海の社員に個別交渉で話を進められていく。もし住民が用地交渉などに応じない場合は、逆に計画より遅れる責任があなたかその人にあるかのような言い方で結論を急がせる。住民側から見れば極めて一方的で不当な同意のさせ方である。加えて、もうひとつ、今年8月の道路工事説明会後の記者会見の席上で、沢田担当部長は「しつかりしたポリシーを持っている人もいるので、意見が反対から賛成にはならないと思う。そういう方が意見の大半かといえば、そうではないと思っっている」と発言、根拠として「質問した人の多くが以前の説明会でもよく質問している」ことを挙げている。このことは、自分たちJR東海は「住民に対する丁寧な説明を」（一昨年、国土交通相が本事業を認可する際に付言）という指摘をすべて棚に上げ、あることが逆に住民を軽く扱っているかのような内容だ。実際、これがJR東海の本音だろう。

今年になってから沢田担当部長は、事業者たるJR東海が最終的に住民の理解が深まったと理解

したかどうかを判断するとの論法で收拾を図り、着工させようと画策した。JR東海は村民全体への説明会として、先述の8月24日に県道59号線（通称、小渋線）の道路改良に関わる工事説明会、次いで9月7日に南アルプストンネル（長野工区）に関わる工事説明会、10月14日に再度のトンネル工事説明会を開いた。しかし、すでに決まったことを繰り返すだけで、住民の要望を取り入れた新しい提案は全くなかった。何度説明会を開いてもJR東海が住民に歩み寄る姿勢は全く見られず、不誠実な対応が浮き彫りになっただけであった。最後の説明会で、JR東海が再度の工事概要を説明してから質疑応答、そして住民が退席した後の記者会見で、沢田担当部長は「住民の理解はより深まった」として最終的に着工へと踏み出した。

### 3. 何も決まっていない

#### トンネル掘削土の置き場

JR東海は従来、県道の改良工事（59号線、トンネル掘削による残土の搬出などに使用。費用は長野県と分担）が終わるまではトンネル工事には着手しないと声明してきた。ところが、実際はJR東海の杜撰な事業計画が原因で遅れて行くのだが、これはひとえにJR東海自身の問題である。だが2027年開業を絶対視するあまり、その工期を圧縮すべくいろいろと手管を講ずる。そのひ

とつがトンネルの斜坑を含む工事には早期に着手、道路の改良工事が終わるまでの間は大鹿村内（具体的には工事現場となる大河原地区）の土砂置き場に一旦仮置きし、改良が済んだ後に村外に運び出すというものである。大鹿村は狭隘な山間に位置しており、まとまって土砂を置けるような場所はない。にもかかわらず、村有地はもとより河川敷や明らかに二次被害が起きると思われる箇所（七釜など小渋川流域、三正坊など）へもとにかく置くようとしている。現段階で置き場として確定しているのは数カ所のみで、あとは何も決まっていない。

最近報道されたことだが、JR東海が大鹿から発生する残土を隣接する松川町生田に置く予定（合計で約600万立方メートル）としていることに対して、実は地権者の最終的な了解がまだ得られていないこと、そして下流域にある福与地区から残土受け入れ反対の意思表示が出されているのだ。生田全体の中でもこの地区は、伊那谷を襲った1961（昭和36）年の豪雨災害「三六災害」で人家などに甚大な被害を受けている。地元では災害の記憶がまだ生々しいこと、置き場に急傾斜地が含まれて崩落の危険があることなどからこの計画は容認できないとしている。しかも、JR東海はこのようなことが原因で災害が発生したとしてもその際の責任の所在を明確にしていない。し

たがって、土砂を置くことを認めた地権者が賠償責任を負うことも十分に考えられる。

この発生した土砂にはまだ問題がある。自然由来の重金属が含まれている場合の発見から処理方法が明確でないこと、加えてこういった土砂のみならず、薬液注入しながら掘削して発生した土砂は実は産業廃棄物なのだ、という大問題がすっぱりと抜け落ちていく。産業廃棄物を有効に活用することなど簡単にはできないし、もとより処理方法の問題が一切解決されていない。JR東海は、工事現場となる地域へすべてを押しつけることで問題を片づけようとしている。一度汚染された土や水が元に戻ることは決してあり得ない。

いずれにせよ、2027年はいくまでもJR東海の身勝手な開業目標であり、建設工事に否応なく巻き込まれ、生活が破壊される住民には全く関係ない。先にも記した通り、JR東海の企業体質も含め、このリニア中央幹線が一体誰のためなのかのために必要なか。南アルプスの自然環境保護をはじめとして日本全体への影響を考えた時、この工事が将来に一体何を残すのか。それ故、私たちが一刻も早くどのような選択をすべきかは明白である。

— 次号に続く —

（日本山岳会員）

## ◇自然保護委員会の活動記録◇

〈九月度〉

### ① 理事会報告 9月15日(木)

- ・ 組織の立て直し会員増に向けて、理事会が11各委員会からヒアリングを行う。

### ② 山岳団体自然環境連絡会 9月26日

(月)

- ・ 「山の日」記念植樹祭(富士吉田市 新倉山) 10月1日〜2日開催について詳細決定。シカの食害問題の講演 下野(綾)
- ・ シカの被害と対策のシンポジウム開催決定。

日時・2017年3月11日(土)

開場 オリンピックセンター。

プロナトゥーラ・ファンドに自然保護助成金を申請中。

### ③ 自然保護委員会報告 9月28日(水)

- ・ 平成28年度支部合同会議 9月10・11日、東支部、9月24・25日、西支部に委員長参加。

公開講演会・11月25日(金) 18時30分

会場・日本山岳会 104号室

講師・麻布大学のちの博物館上席研究員 高槻成紀氏

演題・「シカ研究者がみた最近の日本の山」

- ・ 来年度の全国集会開催地について。

・ 「木の目草の芽」124号・9月28日発送。

・ 全国集会参加者にも郵送。(123号、

124号は全国集会報告掲載号)

・ 支部自然保護委員長の交代

山梨支部 遠山若枝さん↓大澤純二さ

岐阜支部 西條好廸さん↓藤田純江さん

〈十月度〉

### ① 理事会報告 10月12日(水)

- ・ 平成28年度秩父宮山岳賞の審査、決定。
- ・ 平成28年度会長特別表彰審議、決定。
- ・ 準会員制度導入に伴う支部助成金等の変更について

### ② 山岳団体自然環境連絡会 10月28日

(月) 開催予定

- ・ 10月1日〜2日「山の日」記念植樹祭(富士吉田市 新倉山)に自然保護委員会から、川口委員長、富澤、下野(綾) 西谷の4名が参加。下野(綾)委員が、シカの食害問題の講演を。三春しだれ桜5本を植樹。(MATER)主管、「山岳団体自然保護環境連絡会」主催

・ 3月11日(土)開催予定の「シカ問題シンポジウム」の為、自然保護助成基金プロナトゥーラ・ファンドに申請していた助成金が不採用になった、結果、シンポジウムをセミナーに変更し実施計画の練り直しが必要となった。

### ③ 自然保護委員会報告

・ 10月15日(土)委員会を上高地山岳研究所で開催。

10月16日(日) 上高地自然観察会。

・ 全国集会場を岐阜支部と連絡交渉。

・ 委員会規定における各委員会の業務内容の一部、見直し修正。

・ 次年度事業計画の策定。

・ 「理事会特命事項」の具体的施策として「会員増強施策」と「山の日普及活動」を必ず入れて計画を策定するようにとの指示あり、意見交換をした。

・ 自然保護委員退任…渡邊嘉也委員から退任の申し出があり、承認された。

### 《編集後記》

「…そして大多数の人口が都市住民になり自然から遠ざかった生活をするようになった。そのことは国民の多くが自然のことを知らなくなつたことを意味しそれがこの問題を大きくしている。…」高槻先生が著書『シカ問題を考える』で最後に述べている言葉から。さらに「これから経済的豊かさを追い続けるのはほどほどにして、この平和で自由な社会を維持する方向に向きを変え、自然に迷惑をかけない配慮をしてはどうか」という提案が続きます。自然をめぐる様々な問題を前にして私たちが漠然と感じていることを、高槻先生は明快に語っていました。 元川